ダニエル11章 Part2

「北の王」と「南の王」

11章は長いので、Part1～Part2に分けています。

ダニエル11：18－45（最後まで）を取り扱っています。

はじめに。

- 11章は長いので二つに分けて掲載しています。
- この章の終わりには、11章に関する更なる詳細な注解説明と考察（教訓）が含まれていますが、預言を学ぶ時に重要なポイントや教訓となる事柄は、私たち神の民にとっての重要な学びとなっています。
- 「北の王」「南の王」の幅広い視野を持つ意味のみならず、大変信仰に役立つ注解がなされています。ぜひ、最後まで目を通していただきたいと願います。
- 終末に生きる真の神の民が全員、愛と信仰と知識を得て、希望の救いに至りますようにお祈りいたします。

注解 ダニエル書11：18～21

18 その後、彼は顔を海沿いの国々に向けて、その多くのものを取ります。しかし、ひとりの大
将があって、彼が与えた恥辱をそそぎ、その恥辱を彼の上に返します。
19 こうして彼は、その顔を自分の国の要害に向けるが、彼はつまずき倒れて消えうせるでしょ
う。
20 **彼に代って起る者**は、栄光の国に人をつかわして、**租税を取り立てさせる**でしょう。しかし
彼は、怒りにも戦いにもよらず、数日のうちに滅ぼされます。
21 彼に代って起る者は、卑しむべき者であって、彼には、王の尊厳が与えられず、彼は不意に
きて、巧言をもって国を獲るでしょう。

前回は、クレオパトラの名前が出たところで終わりました。エジプトのプトレマイオス王朝の最後の女王でした。前回の**16節から19節はシーザー（カエサル）のこと**でした。ローマの本格的登場でした。**20節**の**彼に代わって起こる者**とは、**オクタヴィアヌス（アウグストゥス）**、聖書ではアウグスト（ルカ2：1）です。**租税を取り立てさせる**とは、全世界の人口調査（ルカ2：1）は課税のためでした。もう一つの見方では、セレウコス3世となっています。

注解　21-22節

21 彼に代って起る者は、卑しむべき者であって、彼には、王の尊厳が与えられず、彼は不意にきて、巧言をもって国を獲るでしょう。

22 洪水のような軍勢は、彼の前に押し流されて敗られ、**契約の君たる者**もまた敗られるでしょう。

21節「**ペルシャになお三人の王が起る**」は、皇帝チベリウス。しかし一般の注解書は、ここからを、アンティオコス・エピファネスの行動を指したものとしています。中世の法王権ととる見方もあります。

22節「契約の君たる者」。「一週間の間多くの者と、堅く契約を結ぶ」（9：27）イエス・キリストのこと。一般には、ユダヤの大祭司オニアス三世と解釈されたりします。

注解　25-30節

25 彼はその勢力と勇気とを奮い起し、大軍を率いて南の王を攻めます。南の王もまたみずから
奮い、はなはだ大いなる強力な軍勢をもって戦います。しかし、彼に対して、陰謀をめぐらす者
があるので、これに立ち向かうことができません。
26 すなわち彼の食物を食べる者たちが、彼を滅ぼします。そして、その軍勢は押し流されて、
多くの者が倒れ死ぬでしょう。
27 このふたりの王は、害を与えようと心にはかり、ひとつ食卓に共に食して、偽りを語るが、
それは成功しません。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。
28 彼は大いなる財宝をもって、自分の国に帰るでしょう。しかし、彼の心は聖なる契約にそむ
き、ほしいままに事をなして、自分の国に帰ります。
29 定まった時になって、彼はまた南に討ち入ります。しかし、この時は前の時のようではあり
ません。
30 それはキッテムの船が、彼に立ち向かって来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対
して憤り、事を行うでしょう。彼は帰っていって、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょ
う。

注解　25-30節の説明。

ここも何回なところです。**ローマとエジプトの戦い**を描いていると解されていますが、**中世の法王権による十字軍の時代を指すとする解釈**もあります。**一般の注解者はアンティオコス・エピファネスとプトレマイオス六世の角逐を表している**ととります。

なお、「キッテム」（30節）というのも諸解釈があり、もともとは、キプロスのことを指したようですが、一般的には地中海沿岸ととったり、ローマととったり、西方ととったり、あるいはゲルマン民族の侵入のことを指すのではないかとする見方もあります。

注解　31－35節

31 彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。
32 彼は契約を破る者どもを、巧言をもってそそのかし、そむかせるが、自分の神を知る民は、堅く立って事を行います。
33 民のうちの賢い人々は、多くの人を悟りに至らせます。それでも、彼らはしばらくの間、やいばにかかり、火に焼かれ、捕われ、かすめられなどして倒れます。
34 その倒れるとき、彼らは少しの助けを獲ます。また多くの人が、巧言をもって彼らにくみするでしょう。
35 また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために倒れるでしょう。終りはなお定まった時の来るまでこないからです。

この部分も大事なところです。いろんな解釈がありますが、何通りかの見方があります。それをご紹介しておきます。

注解　31節

31 彼から軍勢が起って、神殿と城郭を汚し、常供の燔祭を取り除き、荒す憎むべきものを立てるでしょう。

この聖句はよく問題になります。「常供の燔祭を取り除き」・・とか「神殿・・を汚」すとか、ダニエル書のあちこちと関連のある言葉がでてきます。ここをどう解釈するか。いくつかの解釈がありますが、非常に柔軟で、包括的な見方があります。それはこの31節に四重の適用を見るのです。

まず、最初は、これはアンティオコス・エピファネスがやったことである。紀元前167年から164年にかけての、彼がエルサレムの神殿を荒らしたことを指す。一般の注解者はたいていそうとっています。これをまずとる。第二は、紀元70年、次いで135年の、ローマによるエルサレム陥落です。これを第二の成就と見る。第三に、中世の法王権にあてはめる。キリストのとりなしを除外してしまった。そして人間の考える救いのわざを持ってきた。そういったことにあてはめるわけです。

注解　続き。

確かにそう考えると、32-35節も中世の迫害と関連してよく理解できます。第四に、今はまだわからないけれども、最終時代の反キリストの働きを指すのではないか、ととります。

ですから、非常に幅が広くなります。こうとると全部あてはまるからです。一般の注解書がアンティオコス・エピファネスと言っている。それも当てはまるでしょう。歴史的にはまた、ローマ帝国が実際にやった。これも明らかに当てはまるではないか。聖書的信仰的な意味では、間違った信仰が忠誠を風靡していた、支配していた。これもまた当てはまるではないか。そしてわれわれの目にはまだわからないけれども、最後の時代には、同じように、イエス・キリストのとりなしをどこかにのけてしまおうとする動きが出てくるのではないか。・・・・ですから、過去、現在、未来に至るまで、全部含まれています。これはたいへん興味深い、また有効な見方ではないかと思われます。ただ、こういったいくつかの成就適用を認める見方に対して、それはこれまでの預言解釈から少しずれるのではないかと言って、反対する見方もあります。

注解　36-39節

36 この王は、その心のままに事をおこない、すべての神を越えて、自分を高くし、自分
を大いにし、神々の神たる者にむかって、驚くべき事を語り、憤りのやむ時まで栄えるで
しょう。これは定められた事が成就するからです。
37 彼はその先祖の神々を顧みず、また婦人の好む者も、いかなる神をも顧みないでしょ
う。彼はすべてにまさって、自分を大いなる者とするからです。
38 彼はこれらの者の代りに、要害の神をあがめ、金、銀、宝石、および宝物をもって、
その先祖たちの知らなかった神をあがめ、
39 異邦の神の助けによって、最も強固な城にむかって、事をなすでしょう。そして彼を
認める者には、栄誉を増し与え、これに多くの人を治めさせ、賞与として土地を分け与
えるでしょう。

私たちはふつう、ここを、法王権を指すと解釈しています。

注解

37 彼はその先祖の神々を顧みず、また婦人の好む者も、いかなる神をも顧みないでしょう。彼はすべてにまさって、自分を大いなる者とするからです。

「先祖の神々を顧みず」とは、初代教会からの逸脱・背教を表し、「婦人の好む者」すなわちメシアを、なおざりにする、ととるわけです。「いかなる神をも顧みない」ほどの、はなはだしい高ぶり。

38 彼はこれらの者の代りに、要害の神をあがめ、金、銀、宝石、および宝物をもって、その先祖たちの知らなかった神をあがめ、

「要害の神」とは、この世的な権力。それらへの妥協・迎合と解釈します。

注解　つづき

これに対して、この部分はフランス革命を指すとい解釈もありました（ユライヤ・スミス）が解釈としては一貫性を欠きます。

一般の注解者は、ここもまたアンティオコス・エピファネスの時代の出来事を表すとsくる見方と、いや、これまではシリアとエジプトの戦いを詳述していましたが、ここからは一致しない点が多いので、これは終末時の反キリストを描いているのではないか、とする見方とに大別されます。

注解　40-45節

40 終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船を
もって、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいっていって、みなぎりあふれ、通り過ぎ
るでしょう。
41 彼はまた麗しい国にはいります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しか
し、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼の手から救われましょ
う。
42 彼は国々にその手を伸ばし、エジプトの地も免れません。
43 彼は金銀の財宝と、エジプトのすべての宝物を支配し、リビヤびと、エチオピヤびと
は、彼のあとに従います。
44 しかし東と北からの知らせが彼を驚かし、彼は多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いな
る怒りをもって出て行きます。
45 彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにそ
の終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう。

注解　40-45続き

ここは最も難解な箇所です。ただポイントだけはしっかり押さえておきたいのですが、それはこの40節から45節は、神の民に対する最後の攻撃を描いているということです。

41 彼はまた麗しい国にはいります。また彼によって、多くの者が滅ぼされます。しかし、エドム、モアブ、アンモンびとらのうちのおもな者は、彼の手から救われましょう。

最後の時代の神の民に対する最後の攻撃。ですから、特に11章の44節から12章の1節は、マタイ24章に言われているような「大きな患難」（21節）を指すのではないかとも考えられます。しかしだいじなことは、悪の努力は必ず滅びるということです。

注解　40-45 続き　12：1

45 彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう。

45節にあるとおり、「彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう。」と書かれている通りです。同時に、神の民は必ず救われるということです。

12：1 （下句）しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます。

これら二つは、ダニエル書が1章からずっと言ってきたことと全く同じです。神の民は、いつの時代にも、苦しみや迫害を受ける。しかし、悪の勢力は必ず滅びる。そして、神の民は必ず救われる。いちばん最後の幻・預言でも、それが保証されています。

注解　その他の詳細な点

細かなところを、いくつか見ておきましょう。40節は、神の民を苦しめている二大勢力、神の民に敵対する二大勢力の間に争いが起こることを示していると考えられます。しかし、41節では、「エドム」とか「モアブ」とか「アンモンびと」ーこれは古代における神の民の敵ですー、ところが敵のうちからも、神の民に加わり、最後には救われる人々が出てくる。そういった預言ではないかとも考えられています。あるいは43、44節の「リビヤ」とか、「エチオピア」は、当時としては一番遠くの国々です。この最後の幻の全世界的な性格が、ここにも示されているのではないか。そして44節の「東と北からの知らせ」ーこれが永遠の福音の知らせ、福音の最後の宣布のことを言っているのではないか。ですから、全体の輪郭としては、最後の時代の神の民をめぐるさまざまな動きのことを言っているらしいという、そこまでは考えられているわけです。

注解　その他の詳細な点　続き

前の部分をフランス革命ととったユライヤ・スミスは、この部分をトルコととりました。北の王はトルコ、南の王はエジプトと考えたわけです。しかし、これもやはり急にトルコが登場してくる必然性がない。一貫性がありません。預言の解釈というのは全体的な流れの中でとらえるということが大事です。その時その時の、都合のいい部分だけを取り上げてあてはめていきますと、強引なこじつけになってしまう危険があります。柔軟で、謙虚な姿勢が、いちばん必要なのではないでしょうか。

一般の注解者たちは、ここはアンティオコス・エピファネスについての予言であるとしたり、終末時の反キリストに関するものであるとしたりしています。またここに出てくる固有名詞（民族名や地名）を、字義通りにとる見方と象徴的にとる見方とがあります。

注解　その他の詳細な点　続き

いずれにしても、独断や断定は避ける方が賢明です。柔軟な捉え方が大切です。「歴史がかかれていない。まだ成就していない預言の説明にあたっては、研究者は空想の野をさまようことのないよう、あまりに断定的な主張をすべきではない。現在の真理よりも未来の真理について多く考える人たちがいる。彼らは、自分たちが歩く道にほとんど光を見ないで、自分たちの前方に大きな光を見ると考えるのである」（ジェームズ・ホワイト、RH：No v.29. 1877(SDABC 4:877）。

今、現に与えられている光に注意し、それに忠実に従ってこそ、将来に関する光も、必要に応じて与えられるに違いありません。

11章の考察　（1）

難解な11章ですが、その中からもわたしたちは多くの教訓をまなぶことができます。

（1）「北の王」と「南の王」。これら二つは何を指すのか。それについては、信仰的に考えることができます。旧約聖書時代に、普通北というと、どの国を指したでしょうか。たとえば、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルという預言者たちの時代には、イスラエルの北にも南にも非常な強国がありました。北の強国はバビロンがありました。バビロンは異教、偽りの宗教の権化と言いますか、いろんな神殿や祭壇がありました。ですから、「北の王」とは偽りの宗教ではないか。一方、南の大国はどこですか。エジプトです。エジプトの王は昔何と言ったか。モーセがパロの前に出てきた時、「私は神を知らない」（出エジプト5：2）と言いました。このことを考えると、「北の王」が偽りの宗教を表すなら、「南の王」は「私は神を知らない」というような態度は、ある意味では、南の王ではないか。そして知っていると言いながら別の神々を拝んでいるなら、いわば、「北の王」にあたる。

11章の考察　（1）続き～（2）

ですから、いろんな国々に当てはめると同時に、信仰的な意味では、だれの心にもある、あるいはいつの時代にもある、無神論的な見方と、偽りの神に従おうとする見方と、その両方を表すのではないか。こういった象徴的な見方も可能だということです。

（2）2番目に、神と神の民に対する攻撃は、最後まで続くということです。アンティオコス・エピファネスがそうでした。ローマ帝国の時もそうでした。中世のローマ・カトリック教会もそうでした。

神の民に対して、あるいは聖書の民に対して、昔から今まで、そして一番最後にも、反キリストの活動・攻撃がくるに違いない。しかし、神の民は必ず救われると聖書に約束されています。

11章の考察　（3）～（4）

（3）3番目に、この11章にはいろんなことが出ていますが、**反キリストの精神**が示されている部分があります。それは特に36節から39節にかけてですが、**誇りとか、自己称揚**とか、**自己本位の野心**とか、**この世的なものに頼ろうとする傾向**とか、「**すべてにまさって、自分を大いなる者とする**」（37節）とか。ですから36節から39節まで、反キリストの精神というものを記しているように思われます。私たち自身の内に、こういったものはないかどうか、これは本当に心を探るべきみ言葉だと思います。

（4）4番目に、この11章には、最後の時代の神の民の特徴が描かれています。これは興味深くも大事な点です。11章の中心は「北の王」や「南の王」ではなく、「神の民」であるからです。

11章の考察　（4）続き

特徴の第一は、「自分の神を知る民」（32節）。第二の特徴は、「多くの人を悟りに至らせる」（33節）。これは明らかに　”伝道”です。それは12章の3節とも関係しています。「賢いものは大空のように輝き、また多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう。」ネブカデネザルやダリヨスに対してもそうでしたが、ダニエル書の中には”伝道”、”あかし”の精神が流れています。「この書のメッセージには伝道という要素がある、それを見落としてはならない」（H・H・ロウリー）。第三の特徴は、試みにあうということです。「自分を練り、清め、白くするために倒れるでしょう」（35節）。それほどまでに試練に会う。これは12章の10節にも出てきています。「多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。」試みにあうということは、清められ成長させられるためです。ですから最後の時代の神の民は、「自分の神を知る」、「多くの人を義に導く」、そして、試みに会いつつ成長させられていく。これはすばらしいメッセージです。

11章の考察　（5）

（5）最後に、11章に繰り返し出てくる、非常に目立った言葉に注目しておきたいと思います。それは、「定まった」という言葉です。たとえば、27節「終わりはなお定まった時のくるまでこないからです」。29節「定まった時になって」、35節「終わりはなお定まった時の来るまで」36節「これは定められたことが成就するからです」。12章にも11節に「定められている」という言葉があります。

ダニエル書がずっと言ってきたように、すべてが神のご計画のうちにあるということが、この言葉で表されています。最後の時代のいろんな世界の動き、あるいは患難、しかし全部、実は神のみ手のうちにあって「定められて」いるのです。だからこそわたしたちは、安心して神におすがりすることができます。信頼して歩んでいくことができるのです。

ダニエル11章完。